

李登輝氏、4月訪日に意欲 桜の季節「奥の細道」にノ東京へも

【台北＝河崎真澄】台湾の前総統である李登輝氏(82)は一日、台北市内で産経新聞などとの会見に応じ、第三次小泉改造内閣の発足について、「党内の派閥政治が終焉(しゅうえん)し国益中心の組閣となった」と評価した。麻生太郎氏の外相起用にも触れ、「強い外相になるだろう」と述べ、日本の独自外交の展開に期待感を表明した。自身の再訪日については、「来年四月に『奥の細道』を必ず歩きたい」と話した。

李氏は先の衆院選での自民党圧勝に関し、「国益を優先するよう人民が求め(中国などへの)土下座外交への反感があった」と分析。その上で組閣について「指導者が国全体の立場を考えた。日本は民主政治が伸びて国が強くなる」とみていることを明らかにした。

また、「憲法改正を推進して自衛隊など遠慮がましい言葉をやめて国の軍隊とすべきだ」と、第三次小泉改造内閣への期待を強調、日米と台湾による東アジアの安全保障の枠組みにも言及した。

李氏は、麻生、中川昭一、小池百合子、安倍晋三、額賀福志郎、与謝野馨という入閣組の六氏に祝電を送ったことも明らかにした。いずれも李氏とは旧知の仲という。

5年前の総統退任後、初の家族旅行として昨年暮れから今年初めまで訪日している李氏は、「家内に来年の4月には(念願の)『奥の細道』を必ず歩こうと話した」と明かし、桜の開花時期に合わせて東北地方を訪れる希望を表明した。

訪日目的として、「夕焼け小焼けの童謡にあるような人間と自然が溶け合う日本人の持つ情緒的ないい面は他国にないことであり、(李氏が『奥の細道』で芭蕉について語ることなどで)日本人に改めて良さを知ってもらいたい」と話した。

また、先月の訪米で首都ワシントンで連邦上下両院議員や記者を前に演説した実績を踏まえ、「(首都ワシントンに行けたのに)東京に行けないことはない」とし、1988年の総統就任後、初めてとなる東京訪問に改めて意欲を示した。

日本政府は9月、台湾旅券保持の旅行者への90日間の査証免除措置を恒久化したものの、李氏の入国については、日台間の事前協議の対象としている。李氏訪日には中国が強硬に反発しており、李氏は、小泉政権に強い外交姿勢で独自判断するよう求めた形だ。

【11月2日付・産経新聞】